

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	杉本 美希
		職 位 ・学 位	氏 名	印
論文審査担当者	主 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・博士（看護学）	鈴木 美穂	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・博士（看護学）	福田 紀子	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・博士（医学）	小熊 祐子	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授・博士（看護学）	矢ヶ崎 香	
(論文審査の要旨)				
杉本美希君は「非ホジキンリンパ腫患者のアンメットニーズと Health-Related Quality of Life に関する研究」と題する学位申請論文を提出した。本研究の論文審査会は 2025 年 6 月 25 日に対面で行われた。以下に、論文審査会の要旨をまとめる。 【研究の背景と目的】 がん患者が health-related quality of life (HRQOL) を向上して療養できるよう支援することは第 4 期がん対策推進基本計画においても求められている重要な課題である。中でも、造血器腫瘍は、初期治療の後、長年に渡り疾患や治療の影響が持続するがんである。非ホジキンリンパ腫 (non-Hodgkin lymphoma : NHL) の患者は治療後の HRQOL が低く、治療を続けながら日常生活を継続する過程で、長期的に懸念や苦痛を経験していることが先行研究でわかってきている。一方で、NHL 患者の症状や体験は他者へ伝わりづらいとの報告もあり、HRQOL の向上に向けた支援の検討のためには、患者が支援を必要としていることや、支援を受けているがニーズが満たされず追加の支援を必要としていること、すなわちアンメットニーズの理解が課題である。 上記を背景に、本研究は、疾患や治療の影響を長期的に受けながら生活している NHL 患者の HRQOL に影響するアンメットニーズについて明らかにすることを目的としている。 【論文の構成と概要】 本学位申請論文は、下記 2 編の公刊論文に基づき 4 つの章、2 つの研究で構成されている。 1. Sugimoto M, Yagasaki K, Matsuki E, Shimizu T, Sakurai M, Kataoka K, Doorenbos AZ. Unmet needs and health-related quality of life among patients with relapsed/refractory indolent non-Hodgkin lymphoma: a mixed-methods study. <i>Psycho-Oncology</i>. 2025 Feb 6;34(2):e70103. doi:10.1002/pon.70103. 2. 杉本美希, 矢ヶ崎香. 非ホジキンリンパ腫患者の HRQOL の影響要因: スコーピングレビュー. <i>日本がん看護学会誌</i> in press. 採択日: 2025 年 6 月 19 日. 第 1 章「序論」では、博士論文全体の背景と目的、全体の構成が概説されている。研究の背景として、造血器腫瘍の中でも非ホジキンリンパ腫の患者の HRQOL は低いことを挙げ、特に長期的に生存している NHL 患者の HRQOL に関する研究が不足していることや、NHL 患者の HRQOL 向上を目指した支援の検討に際し、HRQOL を低下させる要因のひとつであろうアンメットニーズを把握することの必要性を指摘する。そして、本研究の目的は、NHL 患者が HRQOL を向上して療養できるよう支援するための基盤を整えるために、疾患や治療の影響を長期的に受けながら生活している NHL 患者の HRQOL に関連するアンメットニーズについて明らかにすることであると述べられている。 第 2 章「研究 1 : 非ホジキンリンパ腫患者の Health-Related Quality of Life の関連要因 : スコーピングレビュー」は上記公刊論文 2. に基づいている。このスコーピングレビューは、初期治療後の NHL 患者において				

支援が必要な対象を把握するために、HRQOL の関連要因を明らかにすることを目的としていた。データベース (PubMed、CINAHL、医中誌 Web) から 609 件を同定し、2011 年のシステマティックレビュー1 編に採用されていない、それ以降に公表された論文に絞り、最終的に 31 件を対象とした。このスコーピングレビューを通して、HRQOL に関連する要因は、年齢、再発や治療ライン数等の患者の特徴、倦怠感や抑うつ、不安等の長期的に持続する身体的および精神・心理的な症状等であり、NHL や治療の影響を持続的に経験し、複数の要因を抱える状況にある NHL 患者は HRQOL が低下する可能性が高いことが明らかになった。

第3章「研究2：再発・難治性のインドレントリンパ腫患者のアンメットニーズと Health-Related Quality of Life：ミックスドメソッド」では、研究1の結果を踏まえて、長期に再発や治療を繰り返しながら生活する再発・難治性のインドレント NHL (r/r iNHL) の患者に焦点を当てている。研究目的は、①アンメットニーズと HRQOL の程度とその関連、②r/r iNHL を抱えて生活することおよび支援の必要性に対する患者の認識を明らかにし、③量的データと質的データを統合してアンメットニーズと HRQOL について広範に深く理解することであり、収斂デザインミックスドメソッドを用いている。量的データは外来通院中の r/r iNHL 患者 50 名にアンメットニーズ (SCNS-SF34) と HRQOL (FACT-Lym) について自記式質問紙調査を行い、統計学的に分析し、質的データは、質問紙調査参加者の中から合目的的サンプリングを行い、20 名に対面の半構造化インタビューを行い、リフレクシブ・テーマ分析を行っている。量的調査では、アンメットニーズは医療システムと情報領域、および心理領域で高く、アンメットニーズと HRQOL は負の相関を示すことがわかった。質的調査では、4 つのテーマ：《目立たない症状》、《遠からず訪れる病状悪化の懸念》、《人生の最善が目標》、《不確かさと生きるための手段》が特定された。量的データと質的データは、ナラティブディスカッションとジョイントディスプレイを用い、わかりやすく統合されている。r/r iNHL 患者は HRQOL の低さを受け入れ、人生を最善にするために努力しており、HRQOL の向上のためには、医療システムと情報、および心理領域を中心とするアンメットニーズを減らすことが重要であることが示唆された。

第4章では、2つの研究の知見に基づき、NHL 患者の HRQOL の向上に向けて、患者が継続的にアンメットニーズを抱えている可能性を認識し、特に医療システムと情報および心理面への支援の必要性に関心を寄せ、患者が支援を必要としているタイミングを見極め、漏れることなく介入することが重要であると総括している。

【課題・指摘事項】

本学位申請論文は、ミックスドメソッドを用いて、対象者を深く理解しようとしている点が高く評価された。主に4点について、質疑がなされ、いずれも適切に回答された。

1. 研究1のスコーピングレビューにおいて、先行のシステマティックレビューに採用されていた文献を除外した点に関して、その先行レビューからの知見と、今回のスコーピングレビューに日本の文献が採用されていない理由について質問があった。先行レビューでは、関連要因の整理はされていたが、なぜそれらの要因がリンパ腫の患者の HRQOL に関連しているかの理由までは考察されておらず、欧米諸国からの文献が多く含まれていたのに対し、今回のスコーピングレビューではアジアからの文献が増えていたこと、しかしながら身体的要因を除外したら日本の文献が含まれなかったことが回答された。

2. 研究2の研究方法について、量的データの対象者母数と選択バイアスの可能性、合目的的サンプリングは選定基準について質問があった。対象者母数については正確には不明であるが、研究者がデータ収集に当たっている際の対象者のうち、主治医からの研究打診で辞退した対象者は 10 名程度と多くないと回答された。合目的的の「目的」は、年齢、性別、治療などがなるべく同一にならないようにし、質的分析のテーマに基づくものではないと回答された。

3. 研究2の質的分析の結果のテーマ《目立たない症状》について、患者の複雑な心理過程を反映させたテーマのほうがよいのではないかと指摘があったが、その点も十分に検討した結果のテーマであることが説明された。

4. 論文タイトルについて、本学位申請論文の主たる研究は研究2であり、研究2の対象者は *rr iNHL* であることから、結論もその対象者における範囲を超えないので、*rr iNHL* を追記したほうがよいのではないかと指摘があった。申請者もその点は気づいていたが、*NHL* に一般化するような総括を試みたとのことで、タイトルはそのままとすることにした。

そのほか、用語の使い方について、下記2点について指摘があったが、誤字脱字についても、適切に修正がなされたことを確認した。

- ・研究1のスコーピングレビューにおける採用文献は主に横断研究であるため、そこから抽出される項目は「影響要因」でなく、「関連要因」とするほうが適切であること。

- ・研究2のアンメットニーズ尺度の結果について、「有病率」ではなく、「割合」などとするのが適切であること。

【審査結果】

上記のように、審査担当者からの質問に対し、終始適切に回答しており、今後の研究の展望についても明確に述べる事が出来ていた。本研究では、看護の課題と捉えた事象に関して、スコーピングレビューからミックスドメソッドを用いて、様々なデータから分析を深めており、博士論文としての価値が高い。

以上より、審査担当者は全員一致して、本学位申請論文をもって杉本美希君に博士（看護学）の学位を授与することが適当であると判断した。